

基調講演 2

問いづくりの今、そしてこれから
～問いと問いづくりをめぐる思考と実践の旅～

〔講師〕 佐藤 賢一（京都産業大学生命科学部 教授／NPO法人ハテナソン共創ラボ 代表理事
／株式会社 HackCamp 共創エヴァンジェリスト）



皆さま、こんにちは。今、紹介していただきました、佐藤です。よろしくお願いします。

私のお話に入る前に、皆さんに協力してほしいことがあります。今日は午後には鼎談という形でのパネルディスカッションがあるとご案内がありました。よろしければ、今のうちに皆さん同士で鼎談ができるように、2人か3人のまとまりをつくっていただけないかと思っています。早速、大人の対応を期待していますが、身近な方と顔を見合わせていただいて、2～3人くらいでチームかなという関係をつくってください。1分くらい時間を取ります。良かったら、簡単に自己紹介もしてください。

良かったら、事務局の方もつくっていただければと思います。

（以下、当日スライド）ちなみに、今、見ているのは「鼎談」でGoogle検索すると、出てきたものです。

寂しいから、独り言を言います。これは、生成AIでつくってもらった基調講演の絵です。それから、このような場所で小グループをつ

くって、話をする仕掛けをつくることについてどう思いますかと、最近、親しくしてもらっているコンサルタントに聞いてみまして、大丈夫かなと思って、やっています。

また、こちらは噂のChatGPTです。

（スライド1）では、皆さんも少しだけ温まったかと思います。今日は、私は50分の時間を頂いて、問いをテーマにしゃべっていいということで、本当にうれしく思います。お付き合いのほど、よろしくお願いいたします。なぜ私なのかという話も、自分なりにちょっと整理してお届けしたいと思っています。

（スライド2～8）配布資料を見ていただくと「問いづくりの今、そしてこれから～問いと問いづくりをめぐる思考と実践の旅～」とあって、何をしゃべってくれるのだろうというタイトルを出しています。先ほどの講演も旅がキーワードで重なっていることに気が付きまして、大変うれしいです。簡単に自己紹介をさせていただきます。皆さんには、資料の中に、QRコード付きのものがありまして、京都産業大学の生命科学部で教員をしています。

今日のアジェンダです。どのようなことをどのような順番でお話するかですが、上から順番にたどっていきたくと思っています。まず1つ目の項目で、私は一体誰で、なぜここで話すかという話です。今、ご紹介していただいたように、今、大学では発生情報研究室CSDラボという名前を標榜して、学生さんたちと一緒に

勉強したり、研究したりしています。一方、今日のテーマに直結する自分自身の身の置きどころとしては、7年前にNPO法人を立ち上げて、問いづくり学習というものを普及させるなど、そのようなことに興味を持っている人と楽しくやっていました。それらを通して社会に何か良いインパクトがもたらせないかと考えて、活動をしています。

(スライド9) つい最近では、オンラインセミナーで、ここにいらっしゃる私以外の7人の方に次々とセミナーをしていただいて、問いをめぐるいろいろな考えや、普段されている取り組みについて紹介していただきました。後で、またその内容も触れたいと思います。

問いをテーマにすると、いろいろな人と出会うことが過去6年、7年の間にありました。併せて、自分の足元の普段の学びの場はもちろんですが、自分が普段いる場所から少し外に出て、いろいろな人といろいろなことを交わし合うことにおいても、私にとって問いは大変大きなテーマで、果てしない旅のさなかにいるという気持ちです。

(スライド 10~13) 法人ではオンラインセミナーや、今年は対面のセミナーもできるようになって、いろいろやっています。少しコマercialになります。今、ハテナソンカードを開発中です。皆さんの現場で問いをつくることを楽しく、ゲーム性を持って取り組むことができるようなツールを開発しています。つい2週間前から、株式会社 HackCamp というところに入社して、問いづくりをビジネスの文脈でどのように生かしていくのか、会社の人たちと連携して取り組みたいと思っています。もともと学校教育を軸足にいろいろな活動をしてきましたが、そのノウハウをほかの文脈にも広げていくことができるのではないかと考えて、今、取り組み始めています。そのようなことをブログに書き始めているというコマercialです。

(スライド14) なぜ私かということですが、

もう少し後で申し上げます。

(スライド15) 私の基調講演として頂いた時間の一番中心となるキーワードは、QFTです。冒頭、長谷川先生のイントロダクションでも紹介されていた『たった一つを変えるだけ』という本で紹介された、問いをつくるためのメソッドです。私がこれに出会ったのが8年くらい前で、すっかり魅了されて、大ファンになり、先ほど来、申しあげているような問いに関係するいろいろな活動をするようになりました。

(スライド16) このスライドは『たった一つを変えるだけ』という本から引っ張ってきた、QFTというツールの具体的なプロセスの流れです。非常にしっかりとした、分かりやすいプロセスとなっていて、やり応えもあって、実際に取り組んでみれば面白く、この方法が持っているポテンシャルにすっかりノックダウンされて、起き上がって活動しているのが今の私です。

(スライド17) 今日の時間の目的は、私自身が問いづくりの今、そしてこれからについて、どう考えて、何をしているかみたいなことを、皆さんにもアクティビティを共有していただきながら、一緒に考えていければと思っています。ゴール設定として私のほうで考えていることは、QFTをはじめとする問いづくりの学び、ラーニングのあり方が、どのようにわれわれの学びを豊かにしてくれるかということを経験していただきながら、皆さん同士でも対話していただいて、何かしらを持ち帰っていただき、「ちょっとみようかな」「面白かったという感想を誰かに伝えたい」という気持ちになっていただくことをゴールに設定したいと思っています。

なぜ私がここにいるかということ、ようやく話すチャンスに恵まれました。この『たった一つを変えるだけ』という本は、アメリカで書かれた本の翻訳本で、吉田新一郎さんという翻訳者の方が翻訳されました。今年度のフォーラ

ムは、吉田新一郎さんが基調講演をされたら良いのではないかという発想がもともとあったようですが、吉田新一郎さんはパスされたそうです。そのパスされたボールが私にぶつかってきて、今、ここに至っている状況です。ということで、私は吉田さんの代わりの気持ちも込めて、精いっぱい話をしていきたいと思います。よろしくお願いします。

(スライド18~20) 3つ目にまいりました。QFTと繰り返し言っていますが、そもそもこれは一体何かというところです。そこをテーマに、ワークの時間をもちたいと思っています。改めて見ていただいているのですが、QFTという方法は、このように書くと6つのステップで構成されています。主に問いをつくる部分でいうと、真ん中の3つです。「問いを出し合う、分類・変換する、優先順位を付ける」です。この3つの部分は、言うまでもないかもしれませんが、学校の現場であれば生徒たち、大学だったら学生、企業研修だったら研修を受ける新入社員という人たちが担う部分です。一番上の問いの焦点の共有は、あまり見慣れない標語になっているかと思います。これは何かというと、オーソドックスな学びの現場で言うところの先生からの発問に相当する、一種の学びのトリガーです。基点となるアクションのことを言います。ただ、ここでは発問ではなく問いの焦点というものを、学校であれば先生、あるいは研修であればインストラクターの方、ファシリテーターの方が提示します。これはクエスチョン、質問ではありません。つまり、学び手が問いを出し合ったり、その他、もろもろの活動をするためのきっかけになるようなテーマ設定だったり、何か問いをつくることを刺激するような情報のことを表します。そういったものをデザインして、先生たちが学び手たちに学びを始めてもらう仕掛けが、QFTのユニークなところの1つになっています。

そこを起点にして、いろいろな文脈で、その

テーマの下、問いの焦点の下で、学び手が問いを出し合って、それを吟味・検討して、磨き上げて、ブラッシュアップして、自分たちが掘り下げるべき大事な問いを見つけ出して、最終的にそこを次の課題解決のアクションにつなげていきます。あるいは、問いそのものを見直すという作業も非常に重要です。その問いが本当に自分たちにとって適切な問いになっているか、ここでは良い・悪いという二項対立ではなく、自分たちが学んでいるという文脈の中で、その問いが自分にとってふさわしい問いになっているかどうかを自分自身で掘り下げたり、ピアレビューを受けたり、客観評価を受けたりという形で掘り下げていく意味での問いの見直しです。そういったプロセスを埋め込んだものになっています。そこの触り、つまり概要的なところを今から皆さんにも体験していただきたいと思っています。

運良くハテナソン共創ラボという団体をつくることを京都市に認めてもらって、大学以外のいろいろな場所で、教育関係や、そうでないところとつながって、このQFTをはじめとするいろいろなアクションでご一緒させていただくことができました。少し活動履歴を数字で示してみようと思って、並べてみました。私たちと同じように問いづくり、例えばQFTのような方法を実際にやってみて、実践してみたいという人が世の中に増えるといいのではないかという仮説で活動していますが、そのようなことに賛同して、実際に一緒にトレーニングに取り組んでくれる人に、何かの権限というか、オーソライズされたものが特にあるわけではないですが、認定証を発行して、そのアクションをいろいろ情報共有したりして、もっと広げていきたいと思いますという活動につながっています。

具体的な問いづくりの現場は、いろいろな場面がありますが、主に学校教育の現場に限って、300人くらい収容の大教室の中で、ある学年の生徒さん全員に、一斉に問いづくりに取り組ん

でもらったり、少人数のテーブルワークの中に問いづくりを導入したりします。場所としては、体育館でそのようなことに取り組んだりもしています。私自身も大学で普段やっている生命科学の専門教育とは別に、問いづくりを核に持つような共通教育科目を担当させてもらっていて、このような現場を学生たちと一緒させてもらったりしています。

(スライド 21) ここまではQFT中心とした、私自身の来歴やモチベーション、テーマのようなところの説明でしたが、ここから皆さんにQFTワークになぞらえてもらおうと思っています。ご覧のとおり、これは問いの焦点となっています。読み上げます。「がん遺伝子(Src)には受精の瞬間、生物発生においても重要な働きがある」これをテーマに、皆さんに問いづくりワークに取り組んでいただくかと思っています。では、1分ほど時間を取りますので、この文章を見てどのようなものでもよいですから、最後にハテナで終わる問いを1つだけ何かに書き留めてみてください。どうぞお願いします。これは個人ワークです。よろしくお願いします。

<個人ワーク>

いかがでしょうか。何かしらの問いができたでしょうか。あのようなテーマを見せられても、「なんのこっちゃ」と思われたかもしれません。遺伝子や生物など、冒頭、ご紹介していただいたように、私は、普段、生命科学という文脈で教育研究活動に従事しているので、私にとっては普段着のテーマの一部を言葉として提示させていただきました。ここにいらっしゃるほとんど全ての皆さまにとっては、日々の仕事であったり、専門分野であったり、業務とはかなり離れたテーマだったかと思います。そういう意味では、皆さんフラットに、あの問いの焦点との距離感は、それぞればらばらだったかもしれませんが、「遠いな」「よく分からないな」というのは皆さん同じ感じではないでしょうか。

問いをつくることは、ある意味、ハードルが高いワークだと私自身は思っています。先ほどのお話の中でも、問いを立てるのが苦手とか、苦手意識があるという方はたくさんいらっしゃると思います。私もこういうことをなりわいにしながら、問いをつくるのは結構苦手です。後々出てきますが、問いを磨き上がる作業はすごく好きですが、最初の問いを立てることは非常に大変です。いろいろな段階を踏んで問いをつくるトレーニングを、私たちは普段の活動で、いろいろな現場で取り組ませていただいています。今日はその一端となります。最初は、非常にシンプルな一文で問いをつくってみましょうと皆さんにお願いしましたが、前提となる知識もないし、昨日まで事前課題として読むものがあってもない中で、急にあんなテーマで問いをつくれと言ってもなかなか難しいですね。

(スライド 22) では、次のステップは、今からちょっとした動画を5分程度見ていただきます。その動画の内容は、最初に提示した問いの焦点がタイトルの短いドキュメンタリームービーです。NHKのある番組で制作されたドキュメンタリーの一部を切り取って、ご覧いただきます。その内容をご覧いただいた上で、もう1回、問いづくりに、今度はグループでチャレンジしていただきます。先ほど、つくっていただいた、鼎談ができるような3人くらいの関係の中で、皆で問いを出し合ってもらってワークに移行したいと思います。問いをつくっていただく前に、このムービーを見ていただきますが、そのときに1つだけお願いがあります。ドキュメンタリーですので、いろいろな言葉や、映像が次から次へと出てきます。ムービーを見ながら、皆さんがインプットされたものだけでいいので、メモ書きで何があったかをできるだけ書き留めてもらいたいです。4~5分とはいえ結構長い、コンテンツが豊富な映像が今から出てきますので、大変かもしれませんが、

少し手を動かす時間と思って取り組んでみてください。では、ムービーを始めたいと思います。

<動画鑑賞>

お疲れさまでした。動画は、ここまでです。いかがでしたでしょうか。おそらく、手元にはメモ書きがびっしりだと思います。では、そこを材料にしながら、ご覧いただいている1個だけ問いを立てていただいたテーマである「がん遺伝子(Src)には受精の瞬間、生物発生においても重要な働きがある」を少し思い出していただいて、問いづくりにより再びチャレンジしていただきたいと思います。

(スライド23)ここからがQFTのワークの問いをつくる学習者が取りかかる具体的なプロセスになりますが、今、ご覧いただいているのは最初のステップの問いを出し合うところです。QFTには独特のルールがあって、この問いを出し合うという段階では、できるだけ全員でたくさん出すことに努めましょう。それから2つ目、問いを出し合っている間は説明したり、話し合ったり評価したり、あるいは答えてしまったりみたいなことは禁止です。それから3つ目、発言する人はあくまで、ハテナで終わるクエスチョンだけを口に出して記録係の人に書いてもらいましょう。記録係の人は、できる限り発言のとおりクエスチョンを書き留めましょう。こういったことがルールとして提示されています。

では、皆さん、先ほど、つくっていただいた小チームで向き合ってください、このルールを尊重しながら、早速、皆で問いを出し合って、それを誰かに書き留めてもらうワークに入ってくださいと思います。では、どうぞお願いします。5分くらい時間を取ります。



<話し合い>

はい、ありがとうございます。5分と言いましたが、結構時間が押しているの、いったん、ここで区切りとさせていただきます。書いている途中の問いを書き終えたら、いったん前を向いていただければと思います。はい、ありがとうございました。いかがだったでしょうか。

ここで、2つ論点を提示したいと思います。1つは、ここに書いてあるルールを一通り説明させていただきましたが、いかがだったでしょうか。簡単でしたか、難しかったですか。思っていたことと違っていたり、思ったとおりでなかったり、いろいろなことがあったと思います。このルールは、QFTを開発したアメリカの団体RQIというところが20年くらいかけて開発した話を聞いています。その中で、最初の取り出しの部分は、ここからは学び手というよりは教え手の立場に立って、俯瞰した目で自分が取り組んだことを客観視していただきたいです。問いを出すときに、われわれの中にはいろいろな壁があります。例えば「こんな質問をしたら怒られるのではないか」「ばかにされるのではないか」など、いろいろなことを考えて、なかなか問いが出せないのが、日本に限らず、いろいろな国の学校現場で問題になっています。あのアメリカでも、そうらしいです。私は、そんなことはない勝手に思っていたが、そういったことを風通し良くするためというのが意図としてあって、2番目の、わいわいがやがやと楽しく意見交換しあって、相手を褒めてあ

げるといふ、一般的なアイデアを創発する現場とは違うルール立てにすることで、誰でも安心して自分の考えを言語化、表現できるようにする土台づくりをかなり意識したつくりになっています。QFT以外では、こういったことは表だってルールという形で共有されることはあまりないと思うので、少し異質な体験にもなると思います。最初からうまくいくかどうかはあまり問題ではなく、このような環境で経験を積み重ねていくことで、どのような人とでも目的に沿ったクエスションの材料出しに貢献できるようになる、相手を尊重しながら、ルールを守りながら取り組むというマインドセットをつくることも、かなり埋め込まれていると考えられています。いかが思われたでしょうか。持ち時間が120分くらいあったら、この辺をじっくり取り組みますが、今日は駆け足で行きますので、よろしくお願いします。2つ目の論点は、自分たちのつくった問いはどうだろうということ。あのテーマに照らして、自分たちのつくった問いは一体何を狙いにしているのか、その問いを通して一体何が手に入りそうか、そのあたりを次のワークで深掘りしていきたいと思います。

(スライド24) 2つ目のステップは問いの分類・変換ですが、これは3つの段階で区切られます。1つ目は、こちらに書いているように、閉じた問いと開いた問いという分類法でもって、自分たちがつくった問いを分類してみるやり方です。ここで言う閉じた問いというのは、その問いに対する答えが「はい」や「いいえ」で答えられます。あるいは、明確な単語で答えが表現できる、選択肢があって、そこから選ぶことができる類の問いのことを言います。例えば「今日は、晴れですか？」という問いは「そうですね、晴れていますね」ということで、これは閉じた問いで、それに対する答えになります。一方、開いた問いというのは、その反対で、その問いに対する答えが「はい」や「いいえ」

では成り立たず、特定のワード1つで収まるようなものでもない、言い方を変えると答え手によっていろいろな答え方がありうる、多様な答えが期待される問いです。「あなたは、京都にどのような魅力を感じていますか？」というのは、よくある問いだと思いますが、これは「はい」では話がかみ合わないし「いいえ」でも同じです。「私は、京都の夜になると真っ暗になるところが大好きです」など、いろいろな答えが出てきます。そのような観点でもって問いを見ていただいたときに、皆さんのつくった問いがどうなっているかを相談しながら、ここからは意見交換をどんどんおこなっていただきます。

その上で、2番目は、閉じた問いと開いた問いにはどんな特徴があるかを話し合います。先ほど、言ったように、閉じた問いと開いた問いには手に入る情報の質の違いがあります。例えば、京都をテーマにしたときにはっきり分かったと思いますが、そこを一般抽象化して、閉じた問いはどのような場面だと役に立つのか、背中合わせにどのような場面だと使い勝手があまり良くないのかを、開いた問いについても検討していきます。具体的な問いからちょっと離れて、閉じた問いと開いた問いの有効性、逆に言うと弱点を言語化する場になります。そういったワークを通して、具体的なテーマの下で具体的につくっていった自分たちの問いを通して、どのような問いがどのような順番で並べば自分にとって学びが深いものになるか、豊かになっていくかを考えていくプロセスになっていくと私は理解しています。

最後の変換というのは、閉じた問いであれば開いた問い、開いた問いであれば閉じた問いに作り直してみようというワークです。これも趣旨は一緒です。自分がつくったオリジナル問いを出発点に、どのような情報がどのような尋ね方だったら手に入るのかということ、考えながらクラフティングしていきます。カスタ

マイズしていくなど、いろいろ言い方があるかもしれませんが、そういったことをグループで協力したり、あるいは一人一人がやってみようということに取り組む、そういうワークになります。ということで、せつかくなので、全部はたどれないかもしれませんが、閉じているか開いているかのワークに少し取り組んでもらえますか。3分くらい時間を取りますので、どうぞお願いします。



<話し合い>

はい、ありがとうございます。時間が押しているので、まだディスカッションが進みそうな感じだと思いますが、次のステップに行きたいと思えます。1つ付け加えると、丸や三角は、これは私が説明すると、問いはそのように二択で分けられるかと感じられたかと思いますが、そのような面は確かにある一方で、はっきりしない問いも世の中には多くあります。そのような問いは、無理に三角、丸にする必要はないと思っています。今の話し合いの中でも「これは、どちらにも取れるよね」みたいなことが出てきたのではないかと思います。そういった問いに出会ったときは、チャンスだと思ってください。問いをブラッシュアップするチャンスです。

問いをブラッシュアップと私がここで言ったのは、高校にせよ、大学にせよ、あるいはその他もろもろの学びの場で、問いを、探究のためや、研究開発、いわゆるリサーチのために問いにきちんと磨き上げていくことが非常に大事なこととして共有されています。そういう意

味では、漠然とした問いからスタートして、個別最適化された、研ぎ澄まされた問いをつくることです。逆に、研ぎ澄まされているが、あまりにも具体的過ぎて、目的を見失いがちな問いの抽象度を上げて、皆が共有できる、あるいは方向性が大きなものにするような問いにしていくブラッシュアップがすごく大事になってきます。そのような意味で、閉じた問い、開いた問いがあいまいになっていくことに出会ったときは、どのように尋ね直せば明確に閉じた問いとしての性質を帯びるかです。あるいは、逆に「あなたの考えが知りたいんですよ」「多様な意見を集めています」という趣旨が伝わるように開いた問いにしていく、問いのリデザインの機会が問いの中に隠れていると考えていただいて、また別の問いをつくって、これはどうだろう、あれはどうだろうというふうを考える場面をつくっていってもらおうとよいと思っています。

(スライド25) QFTでは3つ目の段階で、優先順位を付けるということがあります。これは、私たちはどうしても、問いが目の前にあると何から何まで全部解決しようと考えがちですが、そうではありません。取捨選択してエネルギーを特定の問いに集中する、そのプロセスをたどりましょうというメッセージにもなっています。もちろん、試験勉強、試験のときには目の前にある問いを全部解決しなければ100点は取れないので、そういう場合は大事な問いを選んでいない場合ではありませんが、それ以外の文脈では、エネルギーも、時間も、いろいろなものが限られている中で、自分たちが取り組むべきものを見極めるための基準を考えるスキル、あるいは複数のチームメンバーで合意するためのプロセスのあり方を学ぶ、そういったことがこのプロセスに埋め込まれています。

(スライド26) 今日、体験のためのバーチャルなテーマで問いをつくっていただいたの

で、皆さんにそのプロセスをフォローしていただく代わりに、私が普段、授業の現場で先ほどのようなテーマで学習体験を積んでもらうときに、どのような基準を提示して生徒たちに、学生たちに学びを方向づけてもらっているかの具体例をお示しします。例えば、上の研究者へのインタビューがもしできるとしたら、自分たちが持っている素材の中でどの問いがふさわしいだろうかという方向性です。あるいは、自分たちががん遺伝子Srcをテーマとした探究学習をします。あるいはリサーチ・クエストを立てていくといったときに、どのような問いが素材としてふさわしいのかです。このようなことを具体的に方向づける、あるいは学び手たちにデザインしてもらうことを通して、自分たちが持っている問いのどれがライト・クエストなのかです。つまり、良い問い、悪い問いではなくて、適切かどうかということです。そういったことをしっかりと考えてもらうことを、このQFTは埋め込むことができるものとして運用しています。

(スライド27) 一方、2点、スライドに掲載していますが、自分とは全く違う立場の人になりきって、同じテーマで問いをつくってみるチャレンジもしばしば盛り込むことがあります。これは誰かの身になって考えるとか、自分ごと化するみたいなテーマでもって、今、問題となっている学び方の探索の一環です。例えば、先ほどのようなテーマの下で、実際にがんが発症して苦しんでいる患者さんやその家族がこの動画を見たら、問いとしてどのようなことを立てるだろうか。あるいは、小学生が前提となる知識に関しては、ここにいる皆さんよりも圧倒的にいろいろな知識が不足しているけれども、そういった立場からああいったコンテンツはどのような問いをもたらすだろうかということ、自分の学びでつくってみることを通して、問題に対する一種の鳥の目を養います。メタ認知思考や、複眼的な思考を養うことを期待して

このようなことに取り組んでいくことも、QFTポテンシャルの1つとして非常に面白いものだと思います。

(スライド28) このようなことを通して、問いを見直す、答えを探る次のプロセスに行きませんが、問いのブラッシュアップ、見直しという部分については、最近、つくりつつある一連のワークフローがあって、自分たちがつくった問いが、自分が答えを知っている問いか、知らない問いか、相手が答えを知っている問いか、知らない問いかのようなカテゴリーで問いを見極め直した後で、そこにどのような主語が必要か、どのような文脈が必要か、どのような時間設定が必要かのような肉付けをすることで、抽象度が高い問いを具体的なリサーチ・クエスト、探究のための問いにしていくプロセスを、今、研究開発して、実装し始めています。ということで、私の講演はQFTを実際になぞっていただくことを主目的にしてきましたので、大方そこをたどることができました。

(スライド29~33) 振り返りとインプットに入っていきます。QFTは最初に皆さんがわいわいと、しかしルールを頭に置きながら問いを立てていただくという発散的な思考段階です。そして、その後、問いを分類や変換する、その意味付けを考えるという収束的思考段階です。これは、優先順位付けも思考段階と考えられます。さらには、メタ認知思考、自分たちがどのようなことをどのように学んだか、そこから何を手に入れたかをリフレクションすることも、このQFTのプロセスでは非常に重要視されています。そういった3つの思考段階を、非常にコンパクトに、切れ味良くたどることができる、非常にお得なツールだと私自身は受け止めて、普段、使っています。

私は、この方法と出会って、ハテナをたくさんつくるという意味で、ハテナソンという言葉をつくって、団体の名前や、QFTに限らず問いを立てることをテーマにした学び場づくり

に、これまで取り組んできましたが、ハテナソンというのは既存のアイデアを含むマラソン、アイデアソンであるとか、そのアイデアを実装段階に移すハッカソンという、もう一つのマラソンを使った言葉と並んで、ハテナと電球で未来をつくる、そのような方式をつくって、ときどき私たちの取り組みを具象化しております。

ということで、問いづくり学習が、先ほどの基調講演の中にも取り上げられていた、新しい学術指導要領の中で取り上げられていた3つの柱とどのように紐づいていくのか、さらにはQFTをはじめとした問いづくり学習が、学習者だけではなく、教え手であるわれわれ教師の立場に一体どのような学びをもたらすのかを言語化して、可視化して、かつ客観視するような仕組み、具体的に言うとルーブリックのようなものをつくって、これからそれをオーソライズというか、きちんとしたものに整えて、現場にどんどん導入していきたいと考えています。

(スライド34~36) 最後は、問いづくり先駆者たちの知見です。途中、少し見ていただきましたけれども、9月から11月にかけて7人の方に登壇していただいて、オンラインで話題提供をしていただきました。灘高校で国語の先生をされている井上(志音)さんは、国際バカロレア学習にすごく造詣のある方で、概念型学習といったことをテーマに、いろいろ研究の実践もされています。このQFTプログラムも、NHKの教育テレビのプログラムとしてつくられたということで、多分、日本でQFTを広めることに貢献した第一人者ではないかと思っています。問いという言葉には非常にいろいろな意味があるので、そこをきちんと生徒たちと共有しながら、ここは質問なのか、シンプルな疑問なのか、そういったことを意識して学んでいきたいと思いますというメッセージが、私の中には非常に記憶に残っています。

(スライド37) 京都大学の宮野(公樹)さんは、哲学の立場から問うことの重要性、見直し

がメッセージとしてあります。考えることをもう少し大切にしていきたいと思いますということを強いメッセージとして発信されていきました。

(スライド38) それから、長谷川(元洋)さんは、金城学院大学という愛知にある私立大学の先生ですが、この方は小・中・高・大を問わず、いろいろな現場をお持ちで、教師教育にも非常に経験値をお持ちの方です。この方もQFTに魅了されて、とにかく問いで教室をいっぱいにしようというポジティブなメッセージを発信されていて、すごく共感しました。

(スライド39) 次は、矢吹(博和)さんです。私が最近参加した株式会社HackCampの副社長です。ビジネスの文脈で、最近、話題になっている生成系AIを組み合わせた形での企業研修のあり方やプロジェクトの言語化、そういったことにQFTが非常にパワフルな役割を担うのではないかとということで、eラーニングプログラムをつくって、今、展開されています。Udemy for Businessというeラーニングコンテンツをご存じの方も多いと思いますが、そちらで触れることができます。それが彼らの仕事です。

(スライド40) さらに井澤(友郭)さんです。ワークショップデザイナーという領域から問いづくりをはじめとして、学ぶことや場のデザインを専門にされている方です。この方は問いに関しての本を出されていて、先ほど、私が申しあげた問いをブラッシュアップすることはどういうことなのかを、具体的ないろいろな切り口のワークで展開されています。例えば「SDGsは本当に大丈夫か」みたいな問いは世の中にあふれていますが、その主語は何ですか。「私は、SDGsについてどのくらい知っているのか」という問いなのか、あるいは「国連としてはSDGs達成をどのように見積もっているのか」といった、主語があるかないかだけでも問いに大きな違いが生まれます。そういったことにフォーカスした取り組みを展開され

ています。

(スライド 41) もともとは新聞記者という経歴を持たれていた松本 (美奈) さんです。今はフリーのジャーナリストとして、幾つかの大学で非常勤講師をされながら問いを立てることをテーマにした大学教育に従事されています。われわれも含めて、自分の身の回り半径1メートルくらいにしか視野がないような世界は、問いを立てるスキルを手に入れることで、どんどん開かれていくというメッセージを発信されています。

(スライド 42) 最後ですけれども、Q F Tのおひざ元であるR Q Iで、日本人スタッフとして長年、仕事をされている大内 (朋子) さんです。アメリカの文脈の中で、今、Q F Tがどのようなインパクトをもたらしつつあるのか、そして彼女自身が関心を持っている問うことはどういう能力を育むのかというところを、今、具体的に論文として作成しているとのことでした。印象に残った言葉は、セルフアドボカシーという言い方です。自分自身をしっかりと大事にしなが、自分の生活、人生を豊かにするための営みに注力する趣旨のことだと私は理解していますが、そのために学習者中心のQ F Tの取り組み、ツールは役に立つのではないか、そういう仮説を持たれています。

(スライド 43) これは皆さんのお手元の資料にもありますが、こういった内容をアーカイブで、ハテナソン共創ラボではどなたにでもYouTube でご覧になっていただければいいようにセッティングしていますので、良かったらご覧いただければと思います。お申し込みください。

(スライド 44~49) そして、時間が来たという札が上がりましたが、最後です。冒頭に見ていただいた、この講演の目的とゴールですが、いかがだったでしょうか。皆さんに少しでも「Q F Tって面白そう」とか「1回やったことがあったけれども、こういうことだったのか」みたいなことが、1ミリでも1グラムでも皆さ

んに届けばいいと思っています。私のメッセージは、ハテナソンの問いづくり学習と一緒にやりませんかということです。どうもありがとうございました。

佐藤 賢一 (京都産業大学 生命科学部 教授/NPO法人ハテナソン共創ラボ 代表理事/株式会社HackCamp共創エヴァンジェリスト)

スライド1

第21回 高大連携教育フォーラム

どうすれば **真の問い** を
デザインできるか

—高校の探究と大学の研究の共通点を探る—

2023 12/2(土) ●10:00-17:00 (受付9:30~)
●情報交換会 17:30-18:30  キャンパスプラザ京都

スライド2

問いづくりの今、そしてこれから ~問いと問いづくりをめぐる思考と実践の旅~
佐藤 賢一 氏 (京都産業大学生命科学部 教授/NPO法人 ハテナソン共創ラボ 代表理事)

探究学習のキーワードの一つに「問いづくり」がある。そこで、2つの問いを立てた。1つは「問いをどのように作るか」、もう1つは「問いづくりの場をどのように作るか」である。わたしが7年前に出会った問いづくりメソッドQFT*は、これらの問いについて考え、実践する上で大きな助けになっている。

本講演ではQFTの理念・目的および実施プロセスの説明と体験ワーク、問いづくりやQFTに造詣の深い諸氏から学んだことのご紹介などを通して、問いづくりをめぐる思考と実践の旅のひとつをみなさんと共有したい。

*Question Formulation Technique

スライド3

京都産業大学 生命科学部

知識と技術を深め、社会に生かす。

生命科学部
Faculty of Life Sciences

- ① 学部の学び
- ② 学部紹介
- ③ 講座・授業
- ④ 最新情報
- ⑤ 入試関連情報



スライド4

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)

導入説明(目的とゴールは何か?)

ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)

振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)

問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

よろしく
お願いします!

スライド5

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)

導入説明(目的とゴールは何か?)

ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)

振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)

問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

#1/6

スライド6

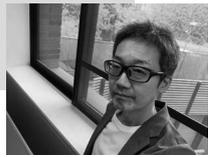
佐藤 賢一 SATO KENICHI

1965年5月 北海道 岩見沢市 生まれ

京都産業大学 生命科学部 教授

NPO法人ハテナソン共創ラボ 代表理事

株式会社HackCamp 共創エヴァンジェリスト



スライド 13



no+e

◀

😊 スタジオQ



はじめまして、スタジオQです。スタジオQの「Q」は、問いを表す英単語 (question) のQであり、好きな言葉のひとつ「ケセラセラ (qué será, será)」の英語つづりの頭にあるQのことでもあります。本noteでわたしが

スライド 14

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

☑ 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)

導入説明(目的とゴールは何か?)

ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)

振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)

問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

#2/6

スライド 15

キューエフティー(QFT)

Question
Formulation
Technique



RQI(USA)が開発した問いづくりメソッド

スライド 16

「問いの焦点」の共有

↓

問いを出し合う

↓

問いを分類・変換する

↓

優先順位をつける

↓

問いを見直す／答えを探る



スライド 17

目的

問いづくりの今、そして
これからを考える

ゴール

QFTと問いづくりはいかにして学
びを豊かにするか?

体験する／対話する／持ち帰る



スライド 18

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

☑ 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)

☑ 導入説明(目的とゴールは何か?)

ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)

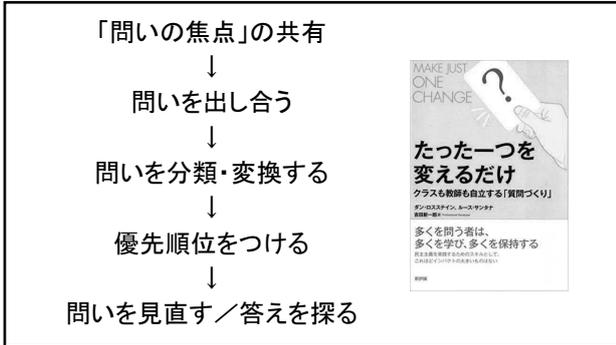
振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)

問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

#3/6

スライド 19



スライド 20

2017年 ハテナソン共創ラボ設立(京都市)

975人 フォロワー／パートナー数

330回超 イベント+授業+研修など開催数

のべ5500人超 ハテナソン/QFTワーク体験者数

1100万円超 のべ収入金額

65人超 認定ファシリテータ数

ハテナソン共創ラボ
プチ白書

スライド 21

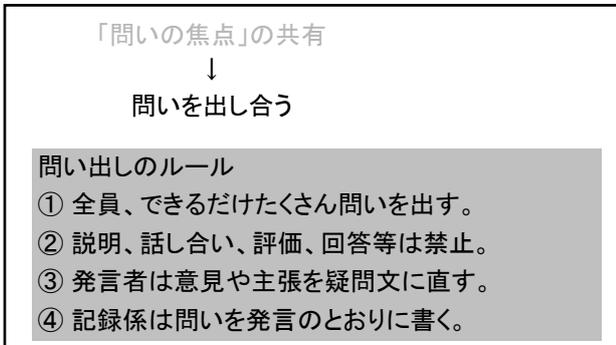
「問いの焦点」

がん遺伝子(Src)には、受精の瞬間
(生物発生)においても重要な働きがある

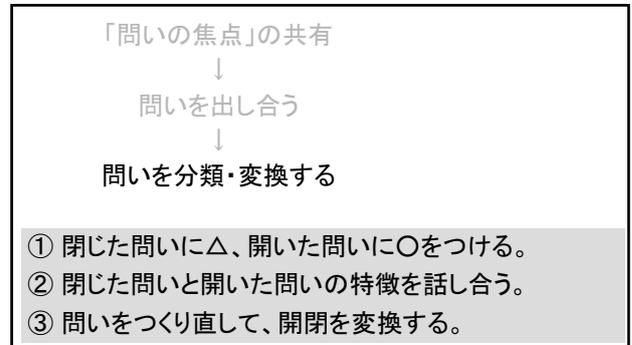
スライド 22



スライド 23



スライド 24



スライド 25

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける

① 大事な問いを最大3つ選び、清書する。
② その理由とともに全体共有する。

スライド 26

A群
研究者へのインタビューで聞きたいベスト3

B群
自分たちの探究テーマとして聞きたいベスト3

① 大事な問いを最大3つ選び、清書する。
② その理由とともに全体共有する。

スライド 27

C群
がんの罹患者やその家族が聞きたいベスト3

D群
小学4年生の子どもが聞きたいベスト3

① 新たに問いを立てる。
② 問いのねらいや、思いを全体共有する。

スライド 28

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る



たった一つを
変えるだけ
クラスも教師も自立する「質問づくり」
オノノスライム、トースワナナ
「多くを問う者は、
多くを学び、多くを保持する」
藤田 隆雄

スライド 29

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)
QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

- ✓ 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)
- ✓ 導入説明(目的とゴールは何か?)
- ✓ ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)

振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)
問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)
おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

#4/6

スライド 30

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る

3つの思考プロセス

発散思考
収束思考
メタ認知思考

スライド 31

* ハテナソン *

“はてな(?)”とマラソンを組み合わせたオリジナルの造語です。あとで説明する問いづくり手法QFTを知ったことをキッカケにつくりました。一人一人の発想が尊重される民主的ルールのもとで行われる問いづくり、および問いづくりの学び場のことを意味します。類似の用語にアイデアソン、ハッカソンがあります。

スライド 32

? + 💡 = FUTURE

ハテナソン
アイデアソン
ハツカソン

スライド 33

? + 💡 = FUTURE

問い、課題
仮説、解決策
実行、検証

スライド 34

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

- 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)
- 導入説明(目的とゴールは何か?)
- ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)
- 振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)

#5/6

問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

スライド 35

Peatix

グループ イベント ホーム 参加者 公開ページ 観覧 視聴 運営

9 ハテナソンONLINE・LIVEセミナー いま、そしてこれからの問いづくり

2023/09/09 日曜 | オンライン | 無料 | 共有 | 共有 | 共有

スライド 36

2023/09/09 土 13:30~

汎用的能力を再考する

井上 志音(いのうえ しおん)
瀬中学校・瀬高等学校 国語科教師

「問いと概念で展開する授業」

スライド 37

2023/09/09土 15:30~

学ぶを学ぶ、問いを問う。

宮野 公樹(みやの なおき)
京都大学際融合教育研究推進センター 准教授
国際高等研究所客員研究員 博士(工学)



「問いの哲学」

スライド 38

2023/10/01日 13:30~

問いは学びの泉

長谷川 元洋(はせがわ もとひろ)
金城学院大学国際情報学部・教授・博士(教育学)



「教室を問いの泉にしよう！」

スライド 39

2023/10/01日 15:30~

AIと問い作りでビジネスを加速。未来の思考力を手に入れよう。

矢吹 博和(やぶき ひろかず)
株式会社HackCamp 副代表
株式会社ラーニングプロセス 代表



「未来を切り開く力: ビジネスパーソンのための問い作りとAI活用戦略」

スライド 40

2023/10/22日 13:30~

機能する問いとしない問いの差とは？

井澤 友那(いざわ ともひろ)
こども国連環境会議推進協会 事務局長
聖心女子大学 現代教養学部 非常勤講師



「対話や学びを一歩進める問いの作り方」

スライド 41

2023/10/22日 15:30~

質問力を磨く「三つの秘訣」をお伝えします。

松本 美奈(まつもと みな)
一般社団法人Qラボ 代表理事 ジャーナリスト



「学びは問いから」

スライド 42

2023/11/04土 21:00~(07:00EST)

「学びと行動に変革を引き起こすQFT(問いづくり)」

大内 朋子(おうち ともこ)
The Right Question Institute (RQI)
Question Formulation Theory Program マネージャー



QFTの開発元、アメリカRQIの30年以上にわたる試行錯誤と効果をお話します！

スライド 43

ハテナソンONLINE LIVEセミナー
(230909, 231001, 231022, 231104) :
アーカイブ動画視聴お申し込みフォーム

本フォームでお申し込み（送付）いただいた日から7日以内に、下記の銀行口座に料金（8888円）をお振り込みください。振り込み手数料はご負担ください。

ゆうちょ銀行
記号 14490 番号 43595861
支店名 (1)ウチノハテナソンラボ
店名 西田八 店番 448
預金種目 普通預金 口座番号 4359586

地方にてご入金（口座入金記録など）を確認のち、ご視聴いただくためのアクセス情報（YouTube限定公開）を本フォームにお書きいただいたメールアドレスにてお知らせいたします。ご視聴いただける期間はアクセス情報のご連絡後3週間（21日間）です。

以上、よろしくお願いたします。
特定非営利活動法人ハテナソン共創ラボ
<https://www.hatenason.com/>



スライド 44

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

- ✓ 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)
- ✓ 導入説明(目的とゴールは何か?)
- ✓ ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)
- ✓ 振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)
- ✓ 問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)

おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

#6/6

スライド 45

目的
問いづくりの今、そして
これからを考える

ゴール
QFTと問いづくりはいかにして学
びを豊かにするか?
体験する/対話する/持ち帰る



スライド 46

わたしはQFTを使った問いづくり学習に大きな可能性を感じ、教
育や研究、そしてビジネスの世界で実践しています。

問いづくり学習『ハテナソン』を始めませんか?

スライド 47

本講演のアジェンダ(何を、どんな順番で?)

QFTを核として行う問いづくりをめぐる、思考と実践の旅

- ✓ 自己紹介(わたしは誰?なぜわたし?)
- ✓ 導入説明(目的とゴールは何か?)
- ✓ ワーク(QFTを使った問いづくりとは?)
- ✓ 振り返りとインプット(QFTにはどんな可能性がある?)
- ✓ 問いづくり先駆者たちの知見(何を考え、行動している?)
- ✓ おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

お疲れさま
でした!

スライド 48

ありがとう
ございました!

- ✓ 振り返り
- ✓ 問いづくり先...
- ✓ おわりに(目的とゴール再訪、KENICHIは何を伝えたい?)

スライド 49

問いづくり授業のdemo、実践
教職員研修、セミナー
個人やグループでのイベント参加
探究学習プログラムなどの策定、運営
目標設定、成果測定、プログラム評価



お気軽にお問い合わせください
@ハテナソン共創ラボ